

2022年度大学入門ゼミ・学科基礎ゼミナール推薦図書 (現代社会学科向け)

1. メディア文化メジャー

★入門

書名	メディア文化論 改訂版		
著者	吉見俊哉	刊行年	2012年
出版社	有斐閣アルマ	価格	1800円
コメント	メディア文化研究についての入門書。新聞、電話、映画、テレビなど様々なメディアについてのこれまでの研究動向が、平易な文章で解説されている。		

★入門

書名	言論の不自由 朝日新聞「みる・きく・はなす」はいま 十年の記録		
著者	朝日新聞社会部編	刊行年	1998年
出版社	朝日新聞社／径書房	価格	2520円
コメント	現代日本の表現の自由を取り巻く状況をルポしたもの。社会のいろいろな所で言論が封じられていることを告発する著作。		

★入門

書名	ネット大国中国－言論をめぐる攻防		
著者	遠藤誉	刊行年	2010年
出版社	岩波新書	価格	798円
コメント	検閲、言論統制のはなはだしい共産主義国家の中国がネットをどのようにコントロールして情報操作を進めているか、それに対し一般市民がどう対抗しているのかの現状が分かりやすく書かれている。		

★入門

書名	(株) 貧困大国アメリカ		
著者	堤美果	刊行年	2013年
出版社	岩波新書	価格	798円
コメント	病める大国と言われて久しい米国がいかに格差社会が進行しているのか、限りないまでに救いがたい現状をルポした力作。		

★入門

書名	就活下剋上		
著者	山内大地	刊行年	2014年
出版社	幻冬舎	価格	780円
コメント	<p>進学しない、あるいは家業を継ぐなどの例外を除くと、大学生の誰もが通り抜けなければならないのが就職活動である。この「就活下剋上」には、驚くべき、就活での学生の実態が余すところなく記述されている。講義のレポートの課題図書に課すと、読破した学生から、「読んで良かった」「自分の生活をあらためたい」とのコメントが相次ぐ。著書は、よくここまで学生に迫り、ここまで凄い情報をかき集めたものだと感嘆する。学問も大事であるが、学生生活で何に留意しながら4年過ごすべきなのか。その指針となるのがこの本である。騙されたと思って一度読んでみたまえ。絶対に損はしません。</p>		

★入門

書名	痛快！コンピュータ学		
著者	坂村健	刊行年	2002年
出版社	集英社文庫	価格	720円
コメント	<p>私たちの生活の中に深く入り込んでいるコンピュータという技術。コンピュータ技術がなければ、実は、コンビニで買い物することもできないのです。本書は、そのようなコンピュータ技術の動作原理や歴史、社会に与える影響などを、非常にわかりやすい文章で解説した入門書です。10年以上前に出た本ですが、面白さとわかりやすさにおいて未だに類書の追従を許しません。</p>		

★入門

書名	デジタルメディア・トレーニング		
著者	富田英典・南田勝也・辻泉編	刊行年	2007年
出版社	有斐閣(有斐閣選書)	価格	1900円
コメント	<p>携帯電話・インターネット・デジタル音楽プレーヤー・ビデオゲーム等の「デジタルメディア」の「現在」「過去」「未来」について、社会学的な視点から考察するための「トレーニング」の本。それぞれのメディアについて考えるための基礎的な知識や先行研究が紹介され、さらに章末ごとに「ゼミナール」として簡単な課題が示されている。2007年に発行された本なので、今では過去のものとなってしまったメディア環境を前提としている記述もあるが、この本で身につくであろう視点や考え方は、現在のメディア環境を考える際にも非常に役立つはずである。</p>		

★入門

書名	フラット化する世界〔普及版〕上・中・下		
著者	トーマス・フリードマン	刊行年	2010年
出版社	日本経済新聞出版社	価格	各1260円
コメント	<p>いま世界のキーワードとなっているグローバル化の入門書。全世界でベストセラーとなった。デジタル・IT革命で世界は様変わりした。メディアの世界も例外ではない。世界はどう変わりつつあり、どういう方向に進むのか。敏腕ジャーナリストが世界を歩きまわったルポで、様々な角度から示唆を与えてくれる。これを読めば茨城に住む自分もどうかかしてはおれないという気持ちになるだろう。</p>		

★入門

書名	ヤンキー経済		
著者	原田曜平	刊行年	2014年
出版社	幻冬舎(幻冬舎新書)	価格	780円
コメント	<p>地方都市や都市郊外で暮らす若者たちの現状を、おもに消費傾向から調査・分析した本。地方の若者は「残存ヤンキー」と「地元族」からなるとし、この組み合わせを「マイルドヤンキー」と命名した。</p> <p>マイルドヤンキーはタバコと焼酎とEXILEが好き、高級ブランドにあこがれる、車は大きければ大きいほどよい、LINEのタイムラインを使う、上京志向がないなどの数々の分析は、地方出身者が多い茨大生にとって目からウロコが落ちるものばかりであろう。やや厳密さを欠く部分もあるが、調べて、分析して、分かりやすく整理するというプレゼンテーションの基本を学ぶには適した一冊である。</p> <p>若者論に興味のある者は、ほかに阿部真大『地方にこもる若者たち』、藤本耕平『つくし世代』などを薦める。</p>		

★入門

書名	ゆるレポ：卒論・レポートに役立つ「現代社会」と「メディア・コンテンツ」に関する40の研究		
著者	岡本健ほか(編)	刊行年	2021年
出版社	人文書院	価格	1800円＋税
コメント	<p>最初に論文やレポートの書き方(そしてそのための資料やデータの調べ方)を提示した後、現代社会論やメディア論の視点に立ったレポートの事例を40個掲載している。どのレポートも数ページの比較的短いもので、テーマは「漫才」「ゲーム」「ミュージアム」「アニメ」「カプセルトイ」「eスポーツ」など多種多様。「ゆるい」テーマでも工夫次第では本格的なレポートに仕上げられることを示してくれる。興味を持てるレポート例から読み始めてもいいだろう。</p>		

★★基礎

書名	テレビの教科書 ビジネス構造から制作現場まで		
著者	碓井広義	刊行年	2003年
出版社	PHP研究所	価格	700円
コメント	<p>TVメディアが創り出す情報をいかに読みとるか。視聴率の謎、ドキュメンタリーの検証、デジタル放送など、現場からみた体験的テレビ論。</p>		

★★基礎

書名	証拠改竄(ざん) 特捜検事の犯罪		
著者	朝日新聞取材班	刊行年	2013年 (2011)
出版社	朝日新聞出版(朝日文庫)	価格	630円
コメント	<p>大阪地検特捜部の犯罪にどうやってたどり着くことができたのか。その背景にあった、メディアと司直の攻防。息詰まる取材の現場が皮膚感覚で知ることができる。</p>		

★★基礎

書名	アメリカ・メディア・ウォーズ		
著者	大治朋子	刊行年	2013年
出版社	講談社	価格	780円
コメント	<p>著者は、足を棒にして、独自にかき集めた情報を基にした調査報道で、優秀な記者であつてもなかなか取ることのできない新聞協会賞に2度も輝いた敏腕女性記者。現在は、毎日新聞エルサレム特派員であるが、ワシントン特派員時代に書いた米国メディア事情特集を本の形にまとめたのがこれである。いろんな面で米国は、日本の10年先を行くといわれる。この本が紹介するようにNPOのメディアは興隆するのか。それとも日本型のメディアができるのか。それを考察するに格好の材料となる。端々に見える取材力の凄さ、取材相手へ食い付きには、脱帽する限りである。</p>		

★★基礎

書名	第五の権力		
著者	エリック・シュミット	刊行年	2014年
出版社	ダイヤモンド社	価格	1800円
コメント	<p>エリック・シュミットは、言わずと知れたネット企業の覇者グーグルの会長です。グーグルが、今後のネット社会の将来をどう見ているのかが分かる論文です。ネット社会は、これからますます拡大を続け、世界は言論の自由が進み、自由で豊かな社会が到来する起爆剤となるのか。はたまた、イスラム原理主義などの過激派の勢力の強大化が進み、世界は、混迷の度を強め、ネット社会は、厳しさを強めるのか。意外とも思える見方が披露されています。新聞は第4の権力と言われますが、この本のタイトルのように、ネットメディアは、第5の権力になるのでしょうか。一度目を通してください。</p>		

★★基礎

書名	八月十五日の神話 終戦記念日のメディア学		
著者	佐藤卓己	刊行年	2005年
出版社	ちくま新書	価格	861円
コメント	<p>「終戦記念日」といえば8月15日である。1945年のこの日、ラジオを通じて天皇の朗読(玉音放送)が流された。しかし、放送後にも空襲はあつたし、武装解除や降伏文書調印はまだ終わっていなかった。ではなぜこの日が「終戦記念日」なのか?そこには戦後のジャーナリズムが深くかかわっている。メディア史・メディア論の真髓が味わえる名作。</p>		

★★基礎

書名	アーキテクチャの生態系		
著者	濱野智史	刊行年	2008年
出版社	NTT出版	価格	1995円
コメント	<p>Google、ブログ、2ちゃんねる、ニコニコ動画、mixi、Twitter……。インターネット空間にあるこれらの環境設計(アーキテクチャ)はなぜ隆盛を極めたのか。ネット文化論をけん引する論者が平易な文章で解き明かした本。発表から10年以上を経てもなお、その鋭い分析は色あせておらず、ネット文化について考えるための出発点として本書は有効であり続けている。ただし刊行時と現在のネットをめぐる状況は変化しているので、読んだあととはかならず現在の状況と比較して考えること。</p>		

★★基礎

書名	デザインド・リアリティ		
著者	有元典文, 岡部大介	刊行年	2008年
出版社	北樹出版	価格	2310円
コメント	腐女子, コスプレ, スタバ, 焼き肉屋といった場所をフィールドとして, 我々がどうやって世界をデザインし, 世界にデザインされていくかを論じた本. 軽い語り口の中に, 非常にラディカルな思想が埋め込まれている. 「文化っぽい現象」を研究したいと薄ぼんやり考えている学生さんの入門にいいかもね.		

★★基礎

書名	心理学化する社会		
著者	斎藤環	刊行年	2009年
出版社	河出文庫	価格	800円
コメント	たとえばトラウマをテーマとした作品テキストがたくさん流通しているが, 伏線や謎の設定として安易に使われすぎている。また一方で, 理解不能な犯罪など(これは現実レベルでも虚構レベルでも人を惹きつけるが)を, 単純に割り切って解釈することもよく見られる。こうした問題は, 社会環境の変容との関わりを踏まえてじっくりと考えるべきことがらであろう。そうした視点をもつための役にたつのではないかと思う。		

★★基礎

書名	マンガ文化 55のキーワード		
著者	竹内オサム, 西原麻里編著	刊行年	2016年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2808円
コメント	本書は, 4コマ漫画, 同人誌, 貸与権などの55のキーワードからマンガ文化を解説する。マンガを娯楽としての読み物という存在から, その成り立ち, 現状を含め, マンガを文化として考え始めるために適した1冊といえる。「マンガについて学ぶ」とはどういうことか, 多様なアプローチの可能性を感じられるだろう。		

★★基礎

書名	アンチソーシャルメディア: Facebookはいかにして「人をつなぐ」メディアから「分断する」メディアになったか		
著者	シヴァ・ヴァイディアナサン	刊行年	2020年
出版社	ディスカヴァー・トゥエンティワン	価格	2300円+税
コメント	日本ではそれほどでもないようだが, Facebookは欧米においてはSNSの代表格とされており, 「それなしには生活が成り立たないほど, 私たちの生活に入りこんだメディア(本書p.3)」になっているという。だが, 米国のメディア研究者である本書の著者は, そのFacebookを「世界中の民主主義と知的文化の劣化(本書p.3)」を招くものとして厳しく批判する。結論には賛否両論あるかもしれないが, 私たちの日常に当たり前に存在するメディアに対して, 本書のような批判も存在するのだということは, 知っておいていいだろう。		

2. 国際・地域共創メジャー

★入門

書名	ジオグラフィー入門 改訂新版		
著者	高橋伸夫ほか編	刊行年	2008年
出版社	古今書院	価格	2,500円
コメント	まちづくり、観光、大震災、新幹線、サッカー、カーリーなど、31のさまざまな面白いトピックから構成される本書は、皆さんが考えている「地理」のイメージをガラッと変えることでしょう。大学で学ぶ地理学は高校で学ぶ「地理」とは異なり、さまざまな事柄が対象であり、答えがまだ見つかっていない社会の問題に挑んでいく学問です。高校で「地理」を選択しなかった人にもわかりやすい内容で、大学で学ぶ地理学の一端を紹介していきます。		

★入門

書名	最底辺のポートフォリオ 1日2ドルで暮らすということ		
著者	J・モーダックほか著 野上裕生監修 大川修二訳	刊行年	2011年
出版社	みすず書房	価格	3,800円
コメント	途上国の貧困問題に対する世界的な注目と「ミレニアム開発目標」から「持続可能な開発目標」に至る国際的な取り組みの中で、1人あたりの収入が1日2ドル未満という数字も貧困者を定義する世界的基準として広く認められるようになってきた。では、世界で7億4千万人近くを占める貧困者の人々は何のような暮らしを送っているのだろうか？ 私たちには実際問題なかなか想像もできない貧困層の暮らしを、本書は貧困層に対する丁寧な聞き取りや家計日誌の記録を通じて浮かび上がらせる。単に「少額」なだけでなく、「不安定」や「予測不可能」といった収入の問題、また、貧しいゆえに人々が編み出した創意工夫や支出における優先順位の付け方など、机上の議論だけではわからない貧困者の暮らしが、「目からうろこ」を含めてわかる本。援助実務者や開発分野の研究者の間でも話題となった、「貧困問題について理解を深める本」である。		

★入門

書名	なぜ貧しい国はなくならないのか 正しい開発戦略を考える		
著者	大塚啓二郎	刊行年	2014年
出版社	日本経済新聞社	価格	2,800円
コメント	『「経済発展は途上国にとって望ましいのか」という疑問をもつ人が少なくないようだが、そうした方々には、現地を訪問することをお勧めしたい。所得が低く、貧困であることが、どれほど厳しいことかを身に染みて感じるができるであろう』という著者の言葉は、国際協力に現場で携わってきた多くの者には共感できるものである。だが、開発途上国を見ると、経済発展が進み人々の所得の増大や生活の質につながってきている国、経済発展は進みつつあるが格差と不平等を広げている国、経済発展からは程遠く停滞と貧困の中にある国とさまざまな状況にある。同じ途上国で、歴史や国際的におかれた位置づけも似たような国でも、開発がうまく行っている国とそうでない国の違いはどこにあるのか？ 国際協力の実務者や研究者が誰も抱くこの問いに、本書は一つの答えを示す。開発経済分野で35年以上の研究歴を持つトップクラスの研究者で、途上国開発の現場にも詳しい著者が、これまでの途上国開発戦略に見られた間違いや取り組むべき政策について「暖かい心と冷静な頭脳」でまとめた本。貧困削減に向けた農業開発や産業開発など、包括的な経済開発戦略の分析と提言は、途上国を知る実務者にも「なるほど納得」と思える内容となっている。開発経済学というと難しそうだが、初心者にもわかりやすい政策論であり、開発について理解を深めたい人にはおすすめである。		

★入門

書名	新・世界経済入門		
著者	西川潤	刊行年	2014年
出版社	岩波新書	価格	1015円
コメント	国際開発学会会長もつとめられた、開発経済学、国際経済学の泰斗によるベストセラー。国際学分野を志す学生には、世界経済への理解は不可欠であり、格好の入門書。		

★入門

書名	国際開発学入門 開発学の学際的構築		
著者	大坪滋、木村宏恒、伊東早苗	刊行年	2009年
出版社	勁草書房	価格	3564円
コメント	国際開発学会特別賞受賞の、日本語で読める国際開発学の最良のテキスト。日本を代表する当該分野の大学院である、名古屋大学大学院国際開発研究科の教員が中心で執筆。開発経済学、開発政治学、開発社会学の三本柱を軸に、農業・農村開発、教育・人材開発、平和構築、環境等を学際的にカバー。タイトルは「入門」だが、専門科目のテキスト・参考文献として十分な内容。		

★入門

書名	Culture Bound		
著者	Joyce Merrill Valdes (Editor)	刊行年	1986年
出版社	Cambridge University Press	価格	3200円
コメント	Contains various essays regarding intercultural communication with a focus on the interrelationship between language and culture. The essays highlight the importance of being aware of cultural differences when communicating with someone from a different culture.		

★入門

書名	多文化社会と異文化コミュニケーション		
著者	池田理知子	刊行年	2002年
出版社	三修社	価格	2520円
コメント	異なる文化を持つ人たちとのコミュニケーションが日常的に増加しつつある現代、地球規模で物事を考えることがますます重要となっている。この本では、異文化コミュニケーションを多面的に捉え、様々な文化をグローバルな視点で考える。時間・空間に関する認識の違いから異文化コミュニケーションを考え、さらにマスメディアの影響、障害者や高齢者とのコミュニケーション、女性の異文化への適応についても考察している。		

★入門

書名	異文化理解		
著者	青木保	刊行年	2001年
出版社	岩波新書	価格	735円
コメント	筆者がタイを始めとして世界各地、日本各地で体験したこと、見聞きしたことなどをもとに、「文化」や「異文化理解」、あるいは文化・異文化に関わる問題などについてわかりやすく語られています。		

★★入門

書名	よくわかる異文化コミュニケーション		
著者	池田理知子編	刊行年	2010年
出版社	ミネルヴァ書房	価格	2625円
コメント	異文化とメディアに関する総合的入門書としてふさわしい。		

★入門

書名	社会学入門		
著者	筒井淳也・前田泰樹	刊行年	2017年
出版社	有斐閣	価格	1,900円
コメント	「出生」「学ぶ／教える」「働く」「結婚・家族」「病い・老い」「死」といった生きていくなかで経験する出来事を各章のテーマとして、それを社会学の見方で理解するとどうなるか、解説している。だれにとっても身近なテーマなので、入門書として最適である。また、異なるデータ分析の方法を専門とする2人の著者が各章の前半と後半を分担しており、アプローチの違いによる社会の見え方の違いを理解するのに適した書籍である。		

★入門

書名	社会学ワンダーランド		
著者	山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹 編著	刊行年	2013年
出版社	新世社	価格	2,600円
コメント	東京大学で2010年度に開講された全13回の学術俯瞰講義がもとになっている。そのため、これまで社会学にふれたことのない人でも、読みやすい文体になっている。掴みどころのないように見える社会学という学問をのおもしろさを、「社会学者が使う、『不思議な方法』や『独特な技』」(同書vページ)、すなわち「ワンダー」を捉えることから理解させてくれる。		

★入門

書名	基礎から学ぶ社会調査と計量分析		
著者	林雄亮・石田賢示	刊行年	2017年
出版社	北樹出版	価格	1,800円
コメント	<p>社会学分野で実証研究を展開していくために必要な知識を易しく解説したハンドブックとされているが、実は、社会学分野以外の初学者にとっても非常に有益な内容となっている。例えば、研究の心構えや研究テーマのみつけ方、問いや仮説の設定、先行研究へのアプローチに関する基本的なコツを紹介しており、大学1年生ができるだけ早い段階で購入して手元に置いておきたい書籍である。全58章から構成されているが、1つのトピックが1章2ページでコンパクトにまとまっている点も、本書の魅力である。</p>		

★入門

書名	社会学用語図鑑		
著者	田中正人ほか	刊行年	2019年
出版社	プレジデント社	価格	1800円＋税
コメント	<p>重要な社会学者や社会学用語について、イラストをふんだんに使いつつ説明がされている。社会学者の部分には、関係の深い「エリア」(出身地など)や「アイテム」、その社会学者を象徴する「セリフ」といった情報が載っており、理解しやすい。社会学用語については見開き2ページの中に、その意味、関連文献、追加情報のメモと、イラスト中心の解説がまとめられており、要点を押さえるのには最適である。本書で社会学を概括的に理解したのちに、気になる社会学者や社会学用語について、原典・専門書を手にとるとよいだろう。</p>		

★入門

書名	社会学をつかむ		
著者	西沢晃彦、渋谷望	刊行年	2008年
出版社	有斐閣	価格	2300円＋税
コメント	<p>社会学はその対象として「社会」を扱う学問であるが、そもそも私たちは日常的に社会とどのかかわっているのか。そのかかわり方について、「社会につながる」「社会に組み込まれる」「社会を生きる」「社会に統制される」「社会に居場所を探す」「社会と向き合う」という本書の章立てにより、複数の側面から考えることができるだろう。</p>		

★入門

書名	社会学入門		
著者	見田宗介	刊行年	2006年 (2017年第6章改訂)
出版社	岩波書店	価格	860円＋税
コメント	<p>著者がこれまで各所で現代社会について論じてきた内容がベースとなって構成されており、いわゆる学問についての体系的・概論的な教科書ではない。しかしながら(であるからこそ?)、著者・見田宗介氏による社会学は、その文体も相まって、読み手である私たちを社会学にぐいぐい惹きつけていく。社会学に初めて関心をもった際、まずはそのおもしろさを、本書で掴んでほしい。ISBNは変更ないが、2017年2月刊行14刷より第6章が全面改訂されている。著者の社会学に魅力を感じたら、同じ岩波書店から出版されている著作集(『定本 見田宗介著作集』『定本 真木悠介著作集』)を手にとるのもいいだろう。</p>		

★★基礎

書名	まなざしの地獄 — 尽きなく生きることの社会学		
著者	見田宗介	刊行年	2008年
出版社	河出書房新社	価格	1296円
コメント	<p>1973年初出の有名論文を単行本化したもの。新たに付された大澤真幸氏の解説と併せて読むと、理解がしやすい。</p> <p>4人を射殺した犯人として1969年に逮捕された19歳の少年N・Nを手がかりとして、当時の日本社会を分析している。ある人間・ある事件を、例外事例としたり個々の内面の問題として扱うのではなく、その人間が置かれている諸関係や社会構造という観点で読み解くその手つきから、社会学という学問がどのようなものか、考えることができるだろう。「統計的な事実の実存的意味」「実存的な諸事実の統計的意味」という表現が登場するが、事例とデータの関係についても、注目してほしい。</p> <p>この本をきっかけに社会学を学ぶのであれば、社会学について順を追って丁寧に考える文体の『社会学入門一歩前』(若林幹夫)や、オーソドックスな社会学の領域を押さえている『社会学講義』(橋爪大三郎/大澤真幸他)などを手にとってみるとよい。</p>		

★★基礎

書名	社会調査のウソ — リサーチ・リテラシーのすすめ		
著者	谷岡一郎	刊行年	2000年
出版社	文藝春秋	価格	842円
コメント	<p>大学生であれば、さまざまなデータを探し、読み解き、ときには自ら分析することが求められる。しかし、そのデータのもととなっている調査が、どれほど信頼に足るものか、考えたことはあるだろうか。また、日常的に目にするニュース報道がどのように私たちに情報を提示しているか、普段どれだけ注意して見ているだろうか。</p> <p>この本は、適切とはいえない調査やその結果を報じた新聞記事をとりあげながら、社会調査の結果を読み解く際のポイントや調査の方法について、より多くの人を読みやすい文体で書かれている。若干古い本だが、多くの人が目にしやすい新聞というメディアを素材としつつも、社会調査の専門的な知識も挿し込んでいる点で、バランスがよい。ただ、『社会調査法入門』(盛山和夫)や『入門・社会調査法[第3版]』(轟亮・杉野勇編)などの、社会調査に関するオーソドックスな教科書も手にとりつつ、社会調査について学ぶべき項目を体系的に把握しておくことも同時に必要。</p>		

★★基礎

書名	異文化コミュニケーションワークブック		
著者	八代京子ほか	刊行年	2003年
出版社	三修社	価格	2800円
コメント	<p>異文化コミュニケーションは国籍が異なるとき、外国人と接するときだけでなく、日常生活の中にもあふれている。本書は異文化コミュニケーションが、ますます日常化していく中で、スムーズなコミュニケーションを行うために必要な能力は何かについて分かりやすく説明しています。たくさんエクササイズがありますから、それらを通して、自らの異文化コミュニケーション能力を試してみるのも楽しいでしょう。</p>		

★★基礎

書名	開発政治学入門 途上国開発戦略におけるガバナンス		
著者	木村宏恒、近藤久洋、金丸裕志	刊行年	2011年
出版社	勁草書房	価格	3,000円
コメント	<p>途上国の開発問題の要因はさまざまあり得るが、途上国の国としての政治のあり方や政府の政策と対応能力、すなわちガバナンスが開発に大きく関わっているというのはもはや国際的に広く認識される場所である。冷戦時代の地政学的政治配慮の優先や「内政不干渉の原則」のもと、それまで取り上げられることのなかった途上国のガバナンスのあり方は、1990年代以降、途上国の独裁政権や汚職の問題、民主化の動きなどの中で「開発を可能とする環境」、「開発の前提条件」として取り上げられるようになり、今や国際開発の議論の中では欠かせないトピックとなっている。「ミレニアム開発目標」や「持続可能な開発目標」で強調されている途上国のオーナーシップも、開発目標達成に向けた途上国のリーダーシップと政策努力を求めている点で、近年のガバナンスの重視と流れを同じくしている。本書は、こうした途上国のガバナンスの問題に焦点を当て、途上国のガバナンスの問題やガバナンスと経済成長や貧困削減の関係、途上国における民主化の課題、平和構築とガバナンスなどについて広く取りまとめたものであり、途上国のガバナンスの問題に関して鳥瞰するうえで役に立つ入門書である。</p>		

★★基礎

書名	アフリカ 動き出す9億人市場		
著者	ヴィジヤイ・マハジャン著 松本裕訳	刊行年	2009年
出版社	英治出版	価格	2,200円
コメント	<p>アフリカというと「貧しい」イメージを持つ人が多いと思う。確かにアフリカは開発途上国の中でも他の地域に比べて開発が遅れているのは事実である。しかし、十年一日な「貧しいアフリカ」のイメージだけでとらえていると、今、アフリカで起きている中間層の増加による膨大なニーズと購買力、成長を続ける若年層市場、ITによる新たなインフラやビジネスの台頭、成長を見越した海外からの「頭脳流入」や中国・インド・欧米諸国の積極的な投資といった、新しいダイナミックな動きを見逃してしまうことになる。本書は、そうしたアフリカの新しい新しい動きにいち早く注目して、それをさまざまな側面から具体的な事例をあげつつ記したものであり、発刊とともに、大きな話題にもなった本である。発刊は2009年で今から10年前になるが、ここに描かれた「兆し」が、その後、まさに現在のアフリカでの動きとなっており、著者の眼力にはいまさらながら脱帽するほかはない。いまだにここまでアフリカの新たな動きを捉えた本は日本では書かれていないことや、中国・インド・欧米に比べて日本企業のアフリカ進出が遅れた状況にあることを考えると、アフリカに経済的に強い地盤を持つインドのバックグラウンドを持つ著者であるからこそ書けたものとも思わせられる興味深い本である。</p>		

★★基礎

書名	『開発を問い直す－転換する世界と日本の国際協力』		
著者	西川潤、下村恭民、高橋基樹、野田真里	刊行年	2011年
出版社	日本評論社	価格	3888円
コメント	<p>国際開発学会の20周年記念として、会長、副会長、本部事務局長の学会執行部が中心となって編纂。国際開発学の最先端の課題と議論について分析。国際的に高い評価を受け、韓国語でも翻訳出版。</p>		

★★基礎

書名	SDGsを学ぶ：国際開発・国際協力入門		
著者	高柳彰夫・大橋正明編	刊行年	2018年
出版社	法律文化社	価格	3200円＋税
コメント	SDGs(Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)について、第I部はSDGs各ゴールの背景と内容を明示。第II部はSDGsの実現に向けた政策の現状と課題を分析。大学、自治体、市民社会、企業とSDGsのかかわり方を具体的に提起。国際開発学研究所の泰斗、西川潤名名誉教授(早稲田大学、2018年10月2日逝去)の遺稿も収録。		

★★基礎

書名	あなたのまちの政治は案外、あなたの力でも変えられる		
著者	五十嵐 立青	刊行年	2015年
出版社	ディスカヴァー携書	価格	3780円
コメント	政府指定のSDGs未来都市、つくば市の現職市長による「SDGsによるまちづくり」「SDGsの地域展開」を先取りした良書。本書発行当時はまだ、国連SDGs(持続可能な開発目標)はスタートとしておらず、著者も市長ではなかったが、その先見性には驚かせられる。舞台は架空の町となっているが、茨城県の某市がモデルと考えられ、そのリアルさには茨城県民であれば、笑いをこらえるのに必死である。		

★★基礎

書名	社会学原論		
著者	宮島喬	刊行年	2012年
出版社	岩波書店	価格	2400円＋税
コメント	社会学の王道的な内容、すなわち、「近代」とは何かという問い、行為・相互行為およびそれらと関係・構造との関連についての説明、行為者と社会・文化のかかわりや帰結の追究などをベースに、構成されている教科書である。社会学を、その理論も含め、基礎からしっかりと手堅く学ぶには最適な本である。本書後半の章は、不平等や文化的再生産の問題を研究してきた著者の専門性が反映された内容になっている。		

★★基礎

書名	21世紀を生きるための社会学の教科書		
著者	ケン・プラマー/赤川学監訳	刊行年	2021年
出版社	筑摩書房	価格	1600円＋税
コメント	イギリスの著名社会学者が執筆した社会学の入門書・教科書の翻訳である。社会学的想像力をもって社会を見つめること、そのための理論、方法について、まとめられている。各章末には、「考えてみよう」という項目でその章に関連する発展課題が記されており、内容理解をもとにした考察のトレーニングがしやすい。原著(Ken Plummer, [2010]2016, Sociology: the Basics, Second Edition, London: Routledge.)もペーパーバックであれば比較的安価で入手しやすく、本書と比較しながら読むと、理解が深まる。		

★★基礎

書名	社会学的想像力		
著者	C・ライト・ミルズ/伊奈正人ほか訳	刊行年	2017年
出版社	筑摩書房	価格	1400円＋税
コメント	<p>本書は社会学の重要古典の訳本だが、これまでの別の訳者による訳本とは別に、新たに訳され、文庫として手ごろな価格で入手できるようになった。社会学的想像力の意味すること、それをもつにはどのような能力が必要かということ、社会学を学ぶ理由、社会学が個人と社会を橋渡しする学問であるという原点について、本書から読み取ってほしい。</p>		